

商品開発から「ものづくりのお手伝い」へ

有限会社 大里化工

創業～高度成長時代～円高不況時代

弊社は、昭和33年墨田区にて、プラスチック射出成形を創業した。当時の主力製品は、サンダルの鼻緒やキンカンの中蓋といった雑貨商品だった。高度成長時代に入ると、輸出用、特にアメリカ向けの子供用玩具への部品供給が売上の殆どを占めるようになった。

当時、自社工場には射出成形機が3台のみであったが、外注会社を10社以上持ち、そのすべての企業の機械もフル稼働しており、射出成形業界も非常な隆盛を誇っていた。

しかし、85年のいわゆるブラザ合意を過ぎると急速な円高が進行し、輸出用が主力であったおもちゃ産業は円高による製造費の高騰に耐えかね、堰を切ったかのごとく海外に生産の場をシフトしていった。

弊社の得意先も海外脱出の影響を受け、その影響が直接売上減少に結びついてしまった。90年代に入るとその動きが加速し、成形ロット数（1製品あたりの生産数）は往時に比べ一桁は減少し、成形単価も損益ギリギリに追い込まれることもしばしばであった。

新商品開発

そんな状況を打開するために思い立ったのが新商品開発であった。もともと設計から試作、量産化といった開発作業に携わることが多かったため、開発のノウハウは蓄えていた。

しかし自社製品となると、開発能力だけでなく新商品アイデアも必要であった。商品ア

イデアを捻出するため、自治体が主催する異業種交流会やデザイン研究会に参加し、また開発費のリスクを抑えるため、自治体の開発支援事業に毎年のように応募していた。

そんな努力が実ったのか、平成12年度墨田区商品開発支援事業の対象となり、本格的な開発に乗り出した。

新商品の開発コンセプトは「パソコン関係の余長煩雑ケーブルを整理収納するグッズ」というものであった。

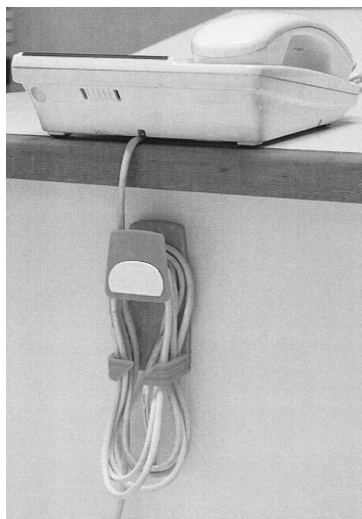
商品開発作業は順調に進み、商品名も「ラインマスターホルダー」と命名した。しかし、本当の困難はここからであった。

製造畑一筋で、営業の「え」の字も知らない町工場……。どこにどうやって売れば良いのか、闇夜に手探りで歩く心境であった。初めに考えたのは、コネを使ってルートを探す事である。これは売り先が見つかるには見つかるが、中間コストが重なり、希望小売価格に届かないケースが続出したので断念した。

次に、産業展や交流会といった展示会に出席を試みた。自社のみの出席では迫力に欠け、コストもかさむため、自治体と共同で出席する事にした。展示会にはバイヤーも多く見学に来ており数社と取引を開始する事が出来た。

最後に勇気を振り絞って、直接問屋や通信販売に商品を持ち込むようにした。飛び込んでみると意外にも反応が良く、取り扱いも打診してくれた。

この商品開発から販路開拓、商品販売と、最初から最後までを従業員10名足らずの零細



ラインマスターホルダー

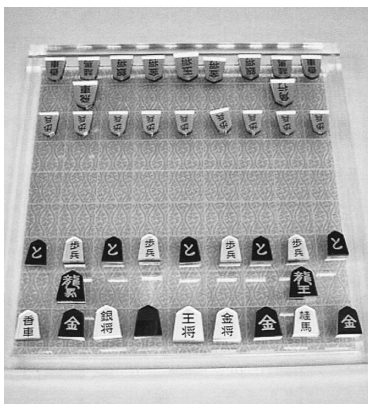
企業で出来たという事実は、大いなる自信と新しいビジネスの発想を与えてくれた。

新事業の立ち上げ～ものづくりのお手伝い

現在取り組んでいる試みは、「ものづくりのお手伝い」と称する開発支援ビジネスである。

これは、自社商品開発で得た開発ノウハウを基に、開発をしたくても出来ない個人や事業者にそのお手伝いをするというものである。開発には非常に大きな労力と費用を要するため、なかなか事業化や製品化に踏み出せない人も多い。それは多くの業者の手を必要とするために、それらを探すだけでも非常に徒労になるからである。

これを、弊社がこれまでに培ってきた協力企業との開発力を武器に、アイデアから設計、試作、量産化までを一括してサポートさせていただいている。弊社の設計の特徴として、3次元CADを積極的に活用していることがあげられる。2次元図面は、同じ製造業者間においては問題なく意思の疎通が図れるが、



将棋盤 フジテレビ「ニューデザインパラダイス」製作協力

製造に携わったことがない人にとっては至極難解なものになる。

これを、3次元CADの立体像を見てもらうことで、依頼者が抱く製品イメージとの相違がハッキリわかり、設計の修正作業も容易なものとな

なった。また、3次元CADは設計作業は勿論の事、プレゼンテーションツールとしても威力を発揮している。通常、得意先や売り込み先に営業に行く際には、これまでは最終イメージとは異なる手作りサンプルや手書きスケッチを持っていくのが常であった。これを、3次元CADの立体像を紙面上で、パソコンのディスプレイ上で表現することで、よりリアルで相手のイメージを膨らませる強力な武器とする事が出来るのである。コスト的にも手作りサンプル等の半分以上で製作出来るため、現在多くの受注を受けている。

今後の目標

製造の場が人件費の安い地域へとシフトする流れは、今後とも変わらず進行して行くと思う。しかしながら、日本でなければ出来ない事は、まだまだたくさん残されていると確信している。その一つが、開発作業であると思う。弊社では、協力会社の輪をさらに拡大して強力なものとし、より多くの商品を産み出して行きたいと考えている。

(有) 大里化工
東京都墨田区墨田5-39-1
<http://www.uclid-f.com/>